

## 共同研究室

共同研究室の運営について

### 一、共同研究の方針

「本学の研究体制にかんする答申」（企画委員会）「教学改善にかんする調査委員会報告と教授会における審議の概要」（経済学部）にもとづき、教育内容の充実と関連して、共同研究を組織する。

共同研究は、個人研究の交流と小グループ研究よりなる。

### 二、研究会の開催

隔週金曜日（年間約十回）二・三〇～五・〇〇の二時間半をあてる（一時間報告、一時間討論、三〇分学界紹介）。

### 三、研究会の内容

研究報告（個人、小グループ、外来講師）と学界紹介。

### 四、研究成果の発表方法

「立命館経済学」その他。

「立命館経済学」に次の二つの欄を新設する。

イ、「共同研究室」欄——報告要旨と意見交換の要約。

ロ、「学界動向」欄

（五、以下省略）

昭和四十年年度第一回研究会（五月二十一日）

▼テーマ「欧米留学見聞記」

報告者 足立 政男氏

**報告要旨** 昭和三十九年九月より十二月までの外国留学で収集された資料、見聞にもとづき、ドイツ、フランス、イタリア、イギリス、北欧三国、アメリカなどの諸国の経済事情を中心にした報告があった。（成果は順次『立命館経済学』に掲載の予定であるが、さしあたり本号の「イタリア経済の動向」を参照。）

昭和四十年年度第二回研究会（六月四日）

▼テーマ「三月革命」期における階級構造」

報告者 川本 和良氏

**報告要旨** ドイツ産業革命研究を推進しようとするさい、まず留意すべきは、(1) 市民革命との交錯（「三月革命」起点に本格的産業革命進行）、(2) 地帯構造の多様性（エルベ河を境とする東西の相剋する社会構造、両地帯内部での領邦的形態のもとで発展段階を異にする地域存在）、(3) 産業革命の所

産がドイツ帝国創立時における社会的、経済的構造であったこと、の三点であると思われる。

この報告では、以上三点を留意したうえで、さし当り、ドイツ産業革命研究を推進するための一作業として、ライン繊維工業を考察の対象としてとりあげ、そこでの三月前期における直接的生産者の状態と、『三月革命』期におけるそれの諸運動の検討を通じて、似而非ボナパルティズム社会構成の原型がどのようにして創出され、また、ライン繊維工業における本格的産業革命進行の条件がいかなる形で与えられたのか、を究明することに問題を限定したいと思う。したがって、ドイツ産業革命の過程を市民革命研究を軸として把握するという意図に立って、この報告では、『三月革命』と産業革命とのそれぞれがもつ社会的側面（『三月革命』のばあいには直接的生産者の『三月運動』、産業革命に関しては似而非ボナパルティズム社会構成に結実していく社会的変革の側面）に焦点を定めて追及することに視角を限定することにした。

報告構成ならびに要旨は以下の如くである。

I、三月前期ライン繊維工業における直接的生産者の状態

(1) ニーダー・ライン綿工業のばあい  
 ▼三月前期綿工業展開の状況（第一表）より考察の手がかり↓  
 ▼男子労働者の状態↓  
 ▼児童・女子労働者の状態↓  
 『三月運動』との連繫↓  
 ▼三九年プロイセン児童保護法成立の事情↓  
 ▼ヴァッパー・タールの考察へ。

(2) ヴッパー・タール繊維工業のばあい

▼三月前期繊維工業展開の状況（第二表）より考察の手がかり↓  
 ▼表における四部門での直接的生産者の状態とそこでの矛盾のあり方の考察、(1)絹織物業・リボン織業(2)トランク・システムを中心とする商人的中間親方対家内労働織布工、(2)レース編業(3)工場対マニファクチュアの対立、(3)トルコ赤燃糸染色業(4)日賃銀をめぐるマニファクチュア主対その労働者との対立↓  
 ▼以上考察結果をニーダー・ライン地方のばあいと比較して要約。

II、ライン繊維工業直接的生産者の『三月運動』

▼ニーダー・ライン地方での運動展開(1)ライン・ブルジョアジーの市民的変革要求に追従↓  
 ▼ヴァッパー・タール地方での運動展開(1)偏狭な経済的要求に立脚して運動展開、(1)トランク・システム反対運動、(2)工場焼うち、(3)賃銀闘争↓  
 ▼

第1表 三月前期 Niedertheim 絹工業展開の状況

絹紡績業	販路	労働手段	製品	経営形態	備考
Niedertheim 絹紡績業		水カミール紡機 手動 蒸気力紡績機	緯生産 緯生産	【初期工場】 本来的工場	。三月前期には圧倒的比重 (Niens 河流域) 。45年以降部分的に出現開始 (Kheydt, Gladbach中心) 。70年代に工場制移行完了
Biber 絹紡績業	低廉で労働者人口に販路	Jacquard 織機と推定	内需用大衆品目	問屋商人→技術者の中間親方→Mann	。50年代に力織機導入 。70年代に工場制移行完了
尋床・鬚子等績織業	?	"	奢侈品目	問屋商人→商人的中間親方→家内労働者	。離地に散在し、衰退過程 。その比重小

第2表 Wuppertal 絹織工業展開の状況

絹織物業	販路	製品	労働手段	経営形態	備考
絹織物業	30年代までは主として中南米諸国	輸出向け奢侈品	Jacquard 織機	問屋商人→商人的中間親方→家内労働者	。30年代末より衰退過程に入り、50年代に Wuppertal より姿を消す。 。しかし、三月前期には絹織工が織布工中第一の地位を占める。
綿リボン織業	"	"	"	"	。絹織物業と相似の経過。 。しかし相違点、絹織機は家内労働者所有(250年代以降蒸気カレーンス編機部分的に導入開始。 。40年代に興隆開始、蒸気カレーンス編機部分的に導入開始。 。70年代に工場制移行完了。
綿レーン編業	労働人口に販路	内需用奢侈品	足踏みレーンス編機 蒸気カレーンス編機	問屋商人→Manufaktur 【「小屋工場」本来的工場】	。80年の Adolf von Bayer による人エノンデコ染色法発見以降工場制へ移行。
トルコ赤燃染色業	Wuppertal 内部で大部分消費	内需用原料		純粋な Manufaktur	

上要約。

Ⅲ、『三月運動』の結果

(1) 『三月革命』への影響と結果

▼プロイセン領編入以後、『三月革命』までのライン・ブルジョアジーのプロイセン絶対主義にたいする関係の推移(四つの時期区分)▼第四の時期(立憲面の考察対象となる時期)『社会問題』がプロイセン絶対主義の社会政策批判を通じて政治的変革要求の理由とされた時期▼二月二六日パリ暴動の報が入った直後のライン・ブルジョアジーの態度(政治的変革要求の堅持)▼『三月運動』展開によるプロイセン絶対主義への妥協決定(市民革命の挫折(似而非)ポナバルティズム社会構成の原型形成)▼妥協したブルジョアジーの二類型(1)政治面で癒着した類型(ウッパー・タール絹・リボン織業問屋商人より現象)その頂点としてA・フォン・デア・ハイト、(2)生産活動に復帰、専念した類型(ニーダー・ライン綿紡織業者、ウッパー・タール・レース編業者)その典型はG・フォン・メヴィッセン(産業革命進行の担い手)。

(2) 『三月運動』の産業革命進行への影響

▼『三月革命』挫折後、直接的生産者にたいする弾圧と慰

撫が政策の一点(ビスマルクの社会改良、『鉛と鞭』の政策の原型形成)▼慰撫策の産業革命進行への作用検討、いままでの考察との関連で(1)五三年児童保護法、(2)四九年トラック・システム禁止法、(3)四九年ツンフト復活令、の作用検討▼(1)は産業革命の進展に作用、(3)は遅れた関係を残す部門、例えば絹織物業で小生産者維持に作用▼この両作用の結果は(似而非)ポナバルティズム社会構成として結実。(附記。この報告は川本和良「ライン繊維工業における直接的生産者の状態と『三月運動』」(歴史学研究)第三〇〇号掲載を基礎として行われたものである。)

意見交換 報告終了後(つぎの四点をめぐって意見交換が行われた。(1)エンゲルス『革命と反革命』における「弱さ」の指摘と報告との関連について、(2)直接的生産者概念と階級・身分概念との関係をめぐって、(3)三月前期の諸階級とイデオロギーとの相関関係について、(3)似而非)ポナバルティズム社会構成の理解について。

▼学界動向「歴史学の課題」

報告者 後藤 靖氏